

宮本武藏

第十三回

桃川如燕口演
浪上義三郎速記

愈々武藏先生今日出立といふ時に徳兵衛が「徳先生今日は太極に目が悪うございますから明日になすつては如何で、武イヤハを還ん、居ては出立がなり兼ねる、思ひ立たな吉日といふ事がある本日其を出さる、徳」左様でございますか其では道中、お氣を著けなすつて、武、種々親切に、悉くいッソで徳兵衛が御申付て御神酒を出す、武、武、先生快く之を食し、杯を取つて徳兵衛に差し、武、さて徳兵衛種々世帯になつたが今生で、武、我が出来るか出来ぬか判らん、お氣も壯健で居て呉れるやう、序でござつたら父の所へ尋ねて呉れ、徳、良まりました、若先生も随分御無事で入つた

らない、何しろ俺は嫌ひだから「徳」を言掛けてズン、往く、男イ、旦那、駕籠に乗らないのや、旦那、臆病武、大きな男を出して呼ぶ、武、忌なしい奴だ、に足らん駕籠屋の事だから、臆病、男引進して来た、武、駕籠屋臆病とは何だ、男、臆病だから臆病、男、何を見て臆病、男、拙者は臆病と言はれた、いから、旦那江戸から九州まで往だ、何が臆病だ、男、何が悪い旦那、お前さんは俺の風采が、男、ものだから怖くつて駕籠へ乗ら



ごじませう。軍夫は強て乗つて呉れといへば乗らんものでもないが併し其様一人でもどうして昇ぐ。梓組が居らんではないか。男「二夫は乗る。と仰つしやれば直に梓組を連れて来ます。武「ハハ此邊に居るのか。男「いくらも居ります。宮本も妙だと思つたが。武「夫では乗つてやらう」と其の智恵へ乗つた。スルと件の男が五

のだらう、**習語**を怖ければ**臆病**のぢやアありませんか、**武**何も貴様を怖がつて乗らんと**いふ譯**ではない様ひだから乗らんと**いふ**の**男**嫌ひ**いふ**事はない**習語**へ乗れば足を用ゐるに往く、此位の**樂**な事はない、

日本 創 業 三百有餘年

もあつたもの之は事に依るべし人々
はあるまいと考へたが果せるかた
下の豪傑、箱根山中の狼退治より、
勇士の出會となる、本誌読者の眼目と
する御話は次回に

四月二十一日九星
三月十九日戊子
本命一白北成免負

清 醉 カルマ イン



各地に所の酒油店に販賣せり
 持約 日本醤油株式會社出張所
 京都太本通二丁目
 電話 二四五五

[illegible]

召し上るにけり血なると肉なると滋養菓子
 本館 堀越嘉太郎製菓店
 東京神田和泉橋
 坂口通東京二四二八



石鹼試驗法

石鹽を差し削つて以融管に入れ之にアルコールを注ぎ好む程混ぜて水に失れば此具の石鹽は透切となる。若し混合物があれば沈澱し其融管が充てば濃縮を見ゆる。又濃縮アルカリを含むものは此の液にフエーメルタレイン一滴を添せば白色に變ずる。

物價騰貴

品質の善悪は十二分の注意が肝要で、
すから兎に角嚴密にお試し下さい。

花王石鹼

限つて如何なる時でも品質に於て純良
無上を期して居るのですから相變らず
帝國陸海軍、帝國大學、赤十字病院等
の御用を承るは勿論皆様が何時御使
になつても

皮膚の化粧衛生には

最も御安心です

最も御安心です

| | |
|-----------------------|---------------------|
| 元入輪本日本香鶴 店理代西區總石王花 | 元造製輪石王花 店理代東區水香鶴 |
| 町士安阪大 | 町喰馬京東 |
| 會商組崎大 | 會商潮長 |

一番
お顔に
ウツリ
のよい

白粉は

生地まで白くなるクラブ白粉と

クラブ
美の素白粉



| | | | | | | | |
|----|---|---|---|---|---|---|---|
| 積電 | 登 | 一 | 期 | 先 | 度 | 定 | 本 |
|----|---|---|---|---|---|---|---|

京 城 日 報

我國の鑛問題

の輸出を絶對に禁止する旨

黨の供給を受けることも多

る鐵材は、一箇年一千三

鐵材は、大正四年度に於

億三千二百餘萬斤、
餉及匹

以て其の輸入數量の大なる

鐵は、主として造船材料

注文契約せられしものに向

我國の造船事業にとりては

○廣大なる測り知る可らざる

十萬噸にして、内地の生産

一に過ぎず。爾餘は國外の

の需給頗る不如意となり、

ユー、エス、ビー会社が買止

止を斷行するに至りし以來

態に在り、今又英國政府が

に造船界の豪むる打撃知る

冬來我國を擧げて鐵の問題

政治家も、軍人も、學者も、
自正策をついて、最も苦心

及び輸入の硬塞が、難て我

痛を救済するの方途を研究

其の救済策たるや、
即ち我

に於ては出來得る限り輸入の

即ち二倍半強となり。全國銀行民間預金高は、明治二十六年には五百一十萬圓弱なりしが、大正三年には四百五十五萬〇二にして二十三倍、一億萬圓強となり。但し此の内には外國より預金の形を以て一時借入れしものをも算入せり。全國銀行貸出金高は、明治二十六年には九千三百萬圓強なりしが、大正三年には三十倍八三九にして、二十八億七千百萬圓弱となり。内國散布の國債は明治二十六年には二億三千五百萬圓弱なりしが、大正三年には四倍二三五して九億九千五百萬圓弱となり。同

て之を見れば長友馬屋原一氏より
 賜贈せる家君の遺著防長十五年史なり
 先考馬屋原二郎氏は明治法政の
 宿志にして其勤勞卓著なるは勲選賢
 族院議員たりして之を知るる
 少時其王愛國の志篤く文久年間
 長友外意の憂あるや同志を糾合し
 軍隊を組織し之が中隊司令たり
 超えて元治年中中隊を率ゐし京師の遠
 征あるや四度の戦争福山松の攻撃時
 加せり能く戦後歐洲に留學し明治
 八年歸朝の後司法省に入り爾後
 二十三年、後貴族院議員に勲選
 然るに昨年新史刊行を以て其遺著を
 刊行せしむるは其志の未だ達せざりしを
 補ふるに非ざるや

日佛協會名譽會員、愛國婦人會
 事務總長の職を受く、本書は氏が晩
 年作の餘業にして陳末病床に在
 るの筆を擲かち、舊陰十一月癸丑の
 前三日にして始めて構成り全圖一
 氏其遺志を繼ぎ此項之上を擧せるな
 り、本書は一、千六百頁附録九十頁
 の大作にして其精力の絶倫なるは言
 ふまでもなく七旬の老翁と謂ふの病
 苦を顧みず激厲大成せる雄志を欲せ
 ずんば非ず、山縣元帥の並氣横力、
 故井上侯の倒瀾在眼、寺内總督の進
 義是存杉子爵の百感慨紙と題する者
 決して虚辭に非ざるなり、本書の記

戦後の平和論 今回の戦亂
 によつて從來動もすれば空論に終
 うとした世界の平和論は漸く實現せ
 らるゝ機運に向つたのである。從來
 正義公道など其眞前に振る擧げて平
 和論を唱へた國は、何れも小國弱國

せんぜん おんぶ
 せんぜん
 法學博士

春の午後 石田富造筆

日本將來の立場 我日本
 如きは最近何度と外國と戰爭を爲
 したが、常に戰勝を外國で爲て居つ
 たら、國民は戰爭の慘禍を感ずる
 が左様に痛切ではないか、今回の
 歐戰の如き全歐洲に亘つて其の慘禍
 著つて居る戰禍は極めて廣大であ
 りて此の戰禍が社會的に見て
 其の内應するに於て、戰後に至
 る各國非常の復讐を爲る事は明か
 る。猶歐洲各國が戰亂の爲め
 へられた經濟上の打撃は愈々外に
 へはならぬ事になる。故に大に軍國
 主義の設備も必要ではあるが又一
 於にはよく彼の思想を理解し其
 特長を尊重し共に永久の平和を享
 する事に努めなければならぬ事
 日 報 歌 壇
 此の歌き 京城 沼上 文庫
 生くるよ事の前には我れと云ふ
 此の算を枉げねばならぬ
 急急にけ行方思へばうれしきか悲し
 か心緒に向へり
 何となく頭の重き此日頃君思ふよ
 うとされて来たり
 歩々々若き心の遠ざきて自炊す
 るてよ老けたる心
 一ばいに春はあるし
 一ばいに春はあるし
 哀愁 雲 雲花
 哀愁多来て我をとりまくそが中に君
 輪の如く舞へり
 安と云ふ撫に伏せりて君が振る腰
 のまにに動ける我を
 のまにに動ける我を
 下につる春の太陽
 七色の虹と砕けて春の太陽は草を
 敷敷の我を包む
 云ひしれぬ喜び事の満く如し温き
 水陸も我が足の底

購買入札公告

朝鮮總督府
總務部
逕信局

正午
五月二十日
總務部

廣 告

第九師團送別並第十九師團歡迎
會期開國致設ヲ爲盛大ナハ
御承知ノ上會費ヲ添ヘ至急御中
會費時
龍山鐵道公園
四月二十三日午後一時
會費
京城府內務係及京城府
申込
龍山出張所
申込
四月二十日正午限リ
正五年四月十四日
第十九師團送別會發起人
金谷 充
原田 金之祐
越田 泰

種禽種卵

委鴉秘術大全
通俗家禽飼養法
定價廿七錢
大脇種禽場
府在京都下大脇町
七七三
七七三

移轉

旭町二丁目(元名古屋城跡)にて
仕候間不相違御引立の程願上候
城南米倉町二五二番地
小林徳三郎
電話三二四番

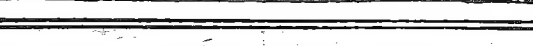
特 價 提 供

諸大家輪轉
中谷無涯著
正岡子規著
正岡子規著
粗山仁三郎著
森林太郎譯
永井荷風著

品 類 別 價

區 域
一等金時計 八十圓十二
二等金時計 五十圓十二
三等金時計 四十圓十二
四等金時計 三十圓十二
外金時計 四十圓十二
價目表 本局 八千五百
價目表 本局 八千五百
注意 但し一冊宛に限り
有札品券と交換

[illegible]

| | | |
|--|---|---|
| <p>我録</p> <p>卒業生校舎 希留通東來 勿論全圖一 に就職せしむ</p> <p>東京之公團大日本國民通信學校</p> <p>電話三五二番</p>  | <p>呉服店</p> <p>五月末日まで</p> <p>東京市丸の内區山手七丁目一四番地</p> | <p>正五年四月一日 西二千九百零六本 千四百三十一本 千三百六十六本 五千二百餘本 品類の外 入札者名 乙種品 連呼す</p> <p>戸部 所張出京露 木玲子 辰</p> |
|--|---|---|

此と材料が丁度押しするもの(2)と
図は他にも少し質物あるものの

THE UNIVERSITY OF CHICAGO PRESS

御披露
和洋装一式

使用あれ
上合の良
好みの品
早速に持参
秘密厳守

日拜三火

| | | | | |
|-----------|----------|----------|----------|----------|
| 掛圖 當長演 | 勤 貞玉演 | 傳 林孝演 | 土 如壽演 | 邱 梅李演 |
| 十二版 | 十一版 | 十三版 | 十五版 | 十六版 |

東京
一

博 文 館

正雪 (9) 大久保彦左衛門
本町 二ツサキ

賣出

より同廿六日迄

ル地ネル地債は

利を打賤すべき覺悟を

五歩弓
は此の限、に非ず

兵服店

したる上(うへ)に、(まへ)に
我にて加害者は何れにて

なる上は、**大**に
 加害者は、**大**に

ものゝ如く装ひ居たる事無き月
其筋に於て犯人眼探中

—り通平太城京— る 煙 柳

1

商船も南方に向け航行したるが其

人は是等の婦女子に對し眼病

二つ

最中に佐藤博士が
巨弾を送つたとい

七十番

專門

千生瓢 (198)

須藤南翠作

小牧市 (六)

「我等が此處へ参る事、敵は早くも知つた。誰かある、後援を我らに送つてくれないか。」
「我らは早くも知つた。誰かある、後援を我らに送つてくれないか。」
「我らは早くも知つた。誰かある、後援を我らに送つてくれないか。」



「我らは早くも知つた。誰かある、後援を我らに送つてくれないか。」
「我らは早くも知つた。誰かある、後援を我らに送つてくれないか。」
「我らは早くも知つた。誰かある、後援を我らに送つてくれないか。」

「我らは早くも知つた。誰かある、後援を我らに送つてくれないか。」
「我らは早くも知つた。誰かある、後援を我らに送つてくれないか。」
「我らは早くも知つた。誰かある、後援を我らに送つてくれないか。」

「我らは早くも知つた。誰かある、後援を我らに送つてくれないか。」
「我らは早くも知つた。誰かある、後援を我らに送つてくれないか。」
「我らは早くも知つた。誰かある、後援を我らに送つてくれないか。」

Various small advertisements including medical services, food products, and local businesses.

Large advertisement for '油断大敵' (Oil Dismissal) featuring a balance scale and text about health and safety.

Bottom section containing shipping schedules for various companies like 日本郵船, 大阪商船, and 朝鮮郵船.